



日本スピッツの歴史

柴 桐

スピッツブーム、そしてその後

この犬種と私との初対面は終戦3年後(1948年)、通学路に面し一般家庭の玄関を店舗にした写真機屋さん(当時はそう呼んでいた)の店内でした。2畳間程の店に入ると、勢い良く座敷から飛び出して来た大小2つの白い物体が、犬であることは理解できたものの、生を受けてこのかた私が犬に対して持っていた概念を覆すイヌの出現に、ただただ驚くばかりでした。この店のご主人は、大きいほうは1歳4ヶ月の牡、小さいほうは生後2ヶ月弱の仔返し交配による牝仔犬で、スピッツと言う犬種であると教えてくれました。純白の長毛種に可憐で高貴な雰囲気を感じ、仔犬にいたっては可憐を通り越し、言葉では表現できないものを感じた出会いでもありました。

それから月日が経過するとともにあちこちでこの白い優雅な姿を見かけるようになり、我が家でも憧れのスピッツと同居が出来るようになっていました。その数年後にスピッツの飼育層は全国的な広がりを見せ、昭和33年(1958年)には年間登録数が頂点に達しました。しかしその後、繁殖数は徐々に下降線を辿りはじめます。この犬種の甲高く喧噪である点に人気低下の原因があるとされ、昭和55年になると、周りには極く稀にしか見られないほどになり、ついには幻の犬種と言われるようになってしまいました。

犬種図鑑の紹介文には、「良く吠えるため番犬としては適していたが、やがて敬遠され頭数も激減した」と書かれ、「吠える犬 = 日本スピッツ」が定着してしまいました。これは間違いとは言えないまでも説明不足な点は否めません。そこでスピッツブーム前後の時代背景を少し振り返ってみようと思います。

世界大戦中から昭和20年の終戦直後に至るまでは、犬の姿は稀にしか見られませんでした。その原因については後で述べますが、戦時下をそっと潜り抜けてきた大・中・小の日本犬が戦後の復興とともに少しずつ姿を見せはじめたものの当時は、まだ犬不足で、雑種仔犬が畜犬商の店頭で売られた時代でもありました。

しばらくしてスピッツが人目に触れるようになり、畜犬店では飛ぶように売れたため牝犬の飼い主の大半は、知識・経験のないまま手近な牡を使って繁殖するようになり、その結果スピッツの資質の低下は免れませんでした。この当時はJKCにもスタンダード(スピッツの理想体を示した標準書)が無く、ただ単に「小型をよし」とした時代でもあり、このことが日本スピッツ改良の歴史に大きな道草を与えます。また、仔犬は血統書無しでも売れたため、無籍犬が登録犬の3倍程度もいたと推定されるような状況でした。しかも一般には犬の飼育は屋外といった意識が強く、スピッツといえども放し飼いの個体が多く、吠えることがより一層印象付けられるようにもなりました。

更には1960年の外貨持出規制法の緩和により海外から、アメリカン・コッカースパニエル、コリー、マルチーズ、ポメラニアン等の洋犬種の輸入が増え、犬のビジネスは日本スピッツからこれらの洋犬種に移行していきます。スピッツブームが過ぎ去った後には、「スピッツは喧噪な犬」というマイナスイメージと、低資質で鑑賞に値しないようなスピッツ群が多く残されました。このような厳しい状況の中でも日本スピッツは根強い愛好者に支えられながら改良が進められ、ブームの産物であった低資質犬系は自然とドロップアウトし、正統派の繁殖に深刻な影響を与えるまでには至りませんでした。

ブームの後、「吠えるため人気急激に低下した」と、犬種図鑑の紹介文に記載され続けましたが最近になって漸く、「改良により無駄吠えがなく、朗らかで繊細な性格は海外の愛好者層を広げ、国内でも復権しつつあります」に変化して参りました。

一方、スピッツの資質面でもブーム時と比較して格段の向上が見られ、スタンダードに近い個体が多くを占めるようになりました。しかし、現在はいまだ日本スピッツ史の通過点でもあります。スピッツ犬をこれから継承していただく方々に良好な繁殖環境を残し、より愛される優れた伴侶犬の作出を託して行くことが総ての日本スピッツファンの願いでもあります。

日本スピッツのルーツ

「日本スピッツ」という犬種名が名付けられたのは1949年でした。祖先は大正末期から昭和の初期にかけてカナダ、旧満州、欧州の各ルートより渡来したホワイトスピッツで、日本スピッツはそれらを選択育種して、一犬種として固定されたものです。

これらの祖犬はどのようにして日本に入って来たのか正確な記録はありませんが、1956年(昭和31年)9月25日に発行された小林文雄著「日本スピッツ」には渡来した11例が記載されています。

1924年、東京の上代氏にカナダより牡2頭、牝2頭が入舎。1928年、浜名湖北部の館山寺の宮本氏がカナダから牡2頭、牝1頭を連れ帰る。1929年、名古屋の森貞次郎氏がハルピンより牡1頭、牝2頭を持ち帰る。1933年、渡辺吉三氏が奉天(瀋陽)から牡を入手し、東京の与芝氏に譲渡。名古屋の遊廓「新福」に牡牝各1頭入舎。1939年、三井物産の深谷氏がハルピンから牡2頭を連れ帰り、名古屋の末竹氏に譲渡。

とあり、この6例以外の5例は繁殖に至らなかった、若しくは消息不明と記載されております。(小林氏の伝聞記録で、年代は2年程度のずれはありえます)

そして、私が1991年大先輩吉田氏から得た情報に「1930年頃、浜松北部の姫街道沿いの旧家に欧州から連れ帰った2頭の牡を飼育し、1933年には交配に訪れた牝犬を目にした」などがあります。移出地がカナダであればアメリカンエスキモー、中国東北部(旧満州)であればロシアスピッツ、欧州ならばジャーマンスピッツ若しくはボルピノであると考えられます。もちろんこの他にも移入実例はあるかも知れません。

いずれにしても情報伝播など現代とは比較にならないほど遅い当時では、移入されたそれぞれのスピッツを効率よく選択して育種するということは困難です。従ってこれらの数少ない種犬だけで一犬種を固定形成することは不可能であったと思われます。

そこで、昭和30年代スピッツブームの頃、犬界の先輩の間で囁かれていた旧満州からの軍関係者による犬の不法持ち込みの話などから、当時の時代背景を踏まえて、推測してみました。

1905年、日露戦争に勝利した日本は南満州鉄道

(長春 - 旅順702km)と付属地の行政権を獲得、関東軍督府陸軍部隊を駐屯させました。1917年のロシア革命後に、日本軍は陸軍部隊を改編し、関東軍として独立させ、最大時58万に兵力を増強しました。一方満鉄は1931年、1,100kmの営業キロ数に、その後1万kmまで延長し、次第に警備する付属地は広大となり、軍馬、軍用犬は必要不可欠になったと思われます。

当時、軍馬は現地調達が可能でしたが、犬はロシア革命により国外亡命した富裕層(白系ロシア人)の飼い犬以外は現地におりませんので、軍用犬の現地調達は不可能でした。そのため軍用犬としてシェパード、ドーベルマン、エアデールテリア等を日本内地から調達しましたが適応犬は少なく、馬よりも犬の方が高価であったとのこと。老いたシェパード等でも積極的に繁殖を奨励したとされます。

日本内地で買い上げられた軍用犬は犬の扱いに馴れた軍属により、軍用列車でハルピンまで輸送されました。ドッグフードの無い時代ですから飯盒で炊いた飯を与え、約5日間で現地に運び、その後軍属は輸送箱と共に内地に帰還するという任務が比較的長期にわたって繰り返されたと推定されます。

現地では当然白系ロシア人の白いスピッツが目につき、初めて見た綺麗な犬は帰国後の土産話に必ず登場したと言います。話を聞いた人の中には<どうしても欲しい>人達が有っても不思議ではありません。動物の持ち帰りは犯罪ですが、何度か往復しているうちに仔犬を入手し、密かに持ち帰る方法を考えついたでしょう。復路出発の点呼を無事に潜り抜ければ軍用列車には臨検は無かったのです。難しいとされた白系ロシア人との交渉や仔犬の受け渡しなどについては、事前に現地人に任せ、当人は現地で平然としていれば軍に怪しまれなかったに違いありません。

国内に運び込まれた仔犬は主として名古屋方面に複数犬が入ったとされ、当事者双方ともに絶対の秘密事項として戦後も守られていたと言います。

そして小林氏の記述には、「綺麗な美しい犬であったが、最初はごく限られた人々の間にしか飼育されず、犬界の流行から除外されていた」とあります。一説によるとスピッツは家が一軒建つほどの値段だったとか、今の私達は本当に幸せなんですね。